

第7章 飯盛山城跡の構造

滋賀県立大学 人間文化学部 地域文化学科 准教授 中井 均

大阪府下には約四五六ヶ所にのぼる中世城館跡が分布している(『日本城郭大系』一二巻 新人物往来社 一九八一年)。それらの大半は江戸時代以降の開発によってほとんどその遺構を残していない。こうした大阪府において三好長慶の築いた芥川山城跡(高槻市)と飯盛山城跡(大東市・四條畷市)はいずれも大規模な中世山城跡であり、残存状況も良好である。

今般、四條畷市教育委員会から委託を受け、この飯盛山城跡の簡易測量を実施した。城跡の測量は城郭研究者による歩測によって作成される縄張り図と呼ばれる図面が活用されている。もちろん城跡の構造を読み込み、その図面の精度は非常に高い。近年では距離計も併用され、より精度の高い図面が作成されている。しかし、問題点としては、曲輪の位置を現在作成されている都市計画図(1/2,500)にどう挿入するかという点がある。そこで曲輪の端部の位置をGPSによって正確に落とし込むことによって、この問題を解消することとした。今回の測量調査は(株)アコードとの共同作業によって歩測とGPSとを併用して実施したものである。使用したGPSはGPS測量のなかでも最新のVRS-GPS測量技術で、誤差2~3cmの高精度のものである。

現地での調査は、平成24年1月5,6,11,12,13の5日間とし、その後、図面の作成を室内で実施した。

飯盛山城跡は河内平野の東辺に横たわる生駒山系の北端部に位置している。城跡の最高所は標高三一五mを測る。城の規模は南北約六五〇m、東西約四〇〇mを測る大規模な城跡である。その特徴は非常な瘦尾根を利用した山城といえよう。主郭Iからは河内平野をほぼ一望することができる。飯盛山城以前の長慶の居城である芥川山城は北摂に築かれた山城であるが、ここからは摂津、河内を一望することができる。

こうした一国レベルが眺望できる山に築かれた山城は単に比高が高いという軍事的要衝というだけではなく、山城から眺望できる地域を支配する戦国大名クラスの居城にふさわしい山であるといえよう。

ここでは飯盛山城跡の構造について検討するものであるが、その前に飯盛山城の歴史について簡単に触れておきたい。三好長慶は永禄三年(一五六〇)に畠山高政、安見直政を攻め、飯盛山城に入城する。それまで居城としていた芥川山城を息子義継に任せ、高屋城とともに河内支配の拠点とした。飯盛山城はおそらく長慶の居城段階に大改修され、城郭としての機能を高めたものと考えられる。

永禄七年(一五六四)に長慶が没し、一年(一五六八)に織田信長が入洛すると、三好義継は若江城に移り、飯盛山城には畠山昭高の家臣遊佐信教が入城する。しかし天正四年(一五七六)には信長に攻められ落城し、以後廃城となった。

こうした歴史から現存する飯盛山城跡の遺構は永禄三~七年の長慶時代、永禄七~一年の義継時代、元亀年間(一五七〇~七三)~天正四年の遊佐信教時代のいずれかのものと考えられよう。

さて、現存する城郭構造であるが、標高三一五mの山頂に高櫓郭と呼ばれる小曲輪Iが主郭に相当する。この高櫓郭Iより北方に本郭と呼ばれるII郭、さらにIII郭、IV郭が階段状に配されている。これらが飯盛山城の中心部分であるが、これらの曲輪から東西方向に尾根筋がいくつも派生している。そのなかでIII郭の西側に伸びる尾根上には大小八段からなる曲輪群を設けている。またII郭の東側には二段にわたる帶曲輪と、さらにその東側に派生する尾根上に二段の曲輪を設けその先端には堀切が構えられている。III郭の東側に派生する尾根上にも大小八段からなる曲輪群が設けられ、その先端には堀切が構えられている。

IV郭の北側は鞍部となり、その北側、標高二八七mのピークに一段と高く、御体塙郭と呼ばれるV郭があり、さらに北方のVI郭へと続く。御体塙郭VとVI郭の間には堀切Aが設けられている。VI郭の北側にはVII郭が構えられているが、その最前線には堀切もなく、そのまま北方へ尾根が下がっていくというやや中途半端な構造となっている。またIII郭とIV郭の間は本来堀切が必要な場所であるが、自然の鞍部のままとしており、地表面からは人工的な加工は施されていない。

御体塙郭VとVI郭は独立した形態となり、西側の尾根には五~六段の曲輪群を、東側では北方の尾根筋に五段の曲輪群を、南方の尾根筋には三段の曲輪群をそれぞれ配置している。なお、この東側北

方の曲輪群の先端には四条の堀切が構えられている。

再び高櫓郭Ⅰに戻り、今度は南方を概観してみたい。高櫓郭Ⅰのすぐ南側には尾根を切断する堀切Bが設けられているが、この堀切Bは東西両斜面に向かって堅堀としている。堀切Bの南方は鞍部となり、その南側に千畳敷郭と呼ばれるⅧ郭が構えられている。なお、この鞍部は現在破壊が著しいが、鞍部の東側に堅堀Cが認められることより、元来は鞍部にも堀切が存在していたことを示唆している。

さて、千畳敷Ⅷ郭はFM802送信所によって破壊されているが、千畳敷は現在六段の曲輪群から構成されている。その中心となるのが標高三一四・五mの地点で、これまでの高櫓郭Ⅰ以北の曲輪群に比べ、広大な面積の曲輪となっている。この千畳敷郭Ⅷも御体塚郭V、VI郭と同様に高櫓郭Ⅰとは深い堀切で切断されていたと考えられ、千畳敷郭の曲輪群のみで独立性が高い。千畳敷郭ⅧはY字に構えられており、西側は曲輪直下に堀切Dを構えている。一方、東側は上下二段となり、さらに下段は再びY字状となり、その西方部分は南丸と呼ばれ、東辺には飯盛山城跡で最も残りの良い土壘が認められる。この土壘は東側直下を通る城道に対して横矢がかかるようになっている。千畳敷Ⅷ郭は広大な面積を有しており、山上部に居住空間の存在した曲輪群と考えられる。

なお、千畳敷Ⅷ郭の南端から城道は南に向かうが、その鞍部は掘り切られておらず、そのまま尾根道に至るという中途半端な構造となっている。これは北端の終わり方と同じで、どうも城域の両端がしっかりと決められていない。芥川山城跡も同じで、東側の帶仕山との間は広大な鞍部とはなっているものの、山を切断するような堀切は設けられていない。

ところで千畳敷Ⅷ郭の先端部、南丸には堀切は設けられないものの、その斜面には畝状空堀群の痕跡らしき遺構が認められる。

千畳敷Ⅷ郭の東側斜面には現在楠公寺が建っているが、ここは通称馬場と呼ばれ、城域の一画であった。

飯盛山城跡の遺構で最も注目されるのは石垣の存在である。現存する石垣は主に高櫓郭Ⅰより北側に集中して認められる。高櫓郭Ⅰの東側直下の城道を保護するように石垣1が、またⅡ郭より東側に派生する尾根上の曲輪群の先端部に石垣2が、さらに御体塚郭VからVI郭にかけて石垣3、4が確認されている。

石垣はいずれも人頭大の自然石を五～八段程度積み上げたもので、その特徴として垂直に積み上げることを意識している。簡単な石垣であり、その使用場所も極めて限定されており、石垣出現期の遺構として位置付けできる。石垣については長慶の居城である芥川山城跡にも部分的に用いられており、長慶によって摂津、河内の諸城にいち早く導入されたようである。

飯盛山城跡は摂津の芥川山城跡とともに大阪府を代表する山城跡である。現存する遺構は永禄三年から永禄七年に三好長慶によって築かれたものと考えられる。特に石垣については芥川山城跡との類似より安土城に先行する石垣の城として評価される。三好氏の城が阿波においてはほとんど発達しないことに対して、畿内への進出に伴なって芥川山城、飯盛山城などを築く。その経緯はまさに戦国期の城が戦いによって発達することを如実に示している。